

子供の力

増井光子

赤ン坊といえは、誰しも小さくて無力で頼りないもの、という印象をもちます。確かに赤ン坊は、大人の保護がなければ生きてゆけません。しかし、赤ン坊は時に素晴らしい生命力を発揮することがあります。

弱いものというと、老人・子供というようによく並べて考えられます。両者とも社会全体の保護が必要とされるのですが、そこには大きな一つの差異があります。それは、老人の場合は、身体の組織がもう衰えてゆく一方なのに、子供の力はこれから伸びる力が十分にあるということです。

動物園で多くの動物たちと接する時、私たちはやはり老獣や幼獣の飼育に気を使います。でも、子供の場合は、溢れる躍動力を十分に発散させてやる心使いも大切です。例えば、

老獣の場合は、冬などは暖房した室に收容したままということもありますが、子供の場合これは余り良くありません。

少々寒気にあてても、広い運動場で走りまわらせ、足腰を鍛えた方が良いのです。多摩動物公園には、ライオン、キリン、チンパンジーなど、アフリカ産の動物が沢山います。アフリカは一般の予想に反して、地方によってはそう暑苦しいところではありませんが、それでも氷点下になることはまず平地ではありません。

ところが、動物公園では氷点下十度以下になることがあります。年に何回かは雪もふります。しかし、そうした中で、今年の二月五日には五十三頭目のキリンの子が生まれました。このキリン児は、二週間もすれば、母親と共に群生活に入つてゆくでしょう。

子供は元気に溢れ、跳んだり走ったり、とてもジツとしてはいられません。その活発さのせいか、骨折というような事故も時々おこります。でも、身体の組織は修復力が旺盛で、すぐに恢復してしまいます。以前にアメリカバイソンの子供が、うしろ足をポッキリ折ってしまったことがあります。

骨折の治療には、副木をあてて動かさないのでおく方法と、骨の中にステレンスのピンを通して固定する方法がありま

す。成獣の場合は大い、この後者の療法が用いられますが、幼獣の骨折の場合は副木法が良いようです。骨と骨とがほんの一すくつついてさえいれば、造骨作用がおこり、みる間に骨を修復してゆきます。そんな時、多少副木をとったあと、曲ってくっついていても心配無用です。毎日走りまわっているうちに、自然とあるべき肢勢になり、一体この骨が折れたのかと思うぐらいになってしまいます。

他にも病気で、本当に強いなあと感心してしまったことがあります。それはキバノロという小型のシカの場合です。シカといえば誰でもすぐ枝分れた角を想い浮べますが、キバノロには角はありません。代りに犬歯がキバ状となって口外に突き出しています。

このキバノロは六―八月にかけて一―三子を出産するのですが、この頃は雨の多い時期です。

この時も、出産当日は晴天だったのですが、夜半から雨になり、それも相当強く降りました。シカの子は産まれると、自分で隠れ場を探して蹲り、親がくるまでジッとして動かない習性があります。

誕生直後の子を人が不用意にいじると、人の臭いが移って、親が面倒みなくなる例が多いので、普通、子の世話は親

まかせです。ですから、この時もオスのキバノロの子は雨が降ってもそのまま坐りつづけ、すっかり体が冷え切って、翌朝様子をみにいった時は、仮死状態になっていました。しかし、その泥だらけのボロ雑巾のようになってしまった子は、お湯で洗われ、フ卵器の中に入れて暖められているうちに、息を吹きかえし、立派に成長して、甦った男の意味でアゲインと名付けられ、その後七年も動物園で暮らしていたのです。

また、以上のような身体的な生命力の強さの他に、創造力といったものも子供たちは有しています。ニホンザルの社会では、群によって一種の風習というようなものがあり、それが次代へ伝承されてゆきます。この新しい習慣の創始者は子供が多いのです。

子供たちは好奇心からさまざまなことをしますが、それが動物社会にとって有益な事柄の場合があります。新習慣は、遊び仲間の間に広がり、やがて母親に支持されて、以後急速に群の風習として定着してゆくようになるわけです。体はたとえ小さく体力的に大人に及ばなくても、幼いものには柔軟な逞ましさがあり、社会を変える原動力があると、つくづく感じさせられます。(多摩動物園)